

## 学力観の変化を見据え「5年後」の家庭科教育を考える

伊井 義人\*

### はじめに

今、この論稿を読んでいる多くの方々は、中学校・高等学校の家庭科教員であろう。皆さんは日々の授業を工夫し、生徒たちに少しでも楽しく、そして、日常に役立つ充実した内容を教えようとしているはずでもある。

そのような読者の皆さんに最初に、あえて問わせていただきたい。

「あなたは、家庭科の授業でどのような学力を大切にしていますか？」

私自身も大学教員であり、研究だけではなく、講義や演習も担当している。この問いを皆さんに問いかける前に、何度も、この問いを自らに投げかけてみた。その結果は一言で表現すれば「理想と現実」は違うということである。ただし、もちろん、何とか現実を理想に少しでも近づけようとはしている。もしかしたら、この私の考えに頷かれている読者の方も多いのではないだろうか。そんな方には特に、この論稿を読んでもらいたい。

文部科学省は、既に次の学習指導要領の策定に動き始めている。それは、下村博文文部科学大臣が、2014年11月に中央教育審議会に対して「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」を以下のとおり、諮問したことでも明らかである<sup>1)</sup>。

…ある事柄に関する知識の伝達だけに偏らず、学ぶことと社会とのつながりをより意識した教育を行い、子供たちがそうした教育のプロセスを通じて、基礎的な知識・技能を習得するとともに、実社会や実生活の中でそれらを活用しながら、自ら課題を発見し、その解決に向けて主体的・協働的に探究し、学びの成果等を表現し、更に実践に生かしていけるようにすることが重要…

そして、このような力を修得するために「何を教えるか」だけではなく「どのように学ぶか」という視点から、課題発見とその解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（アクティブ・ラーニング）が必要になってくることが示されている。この視点は、当然、次の学習指導要領に影響を及ぼすことが予見される。それは、おおよそ十年に一度の改定であるから、早ければ2018・19年には告示されその数年後には実施となる。今から5年後である。

そこで、本稿で読者の皆さんに伝えたいことは、①「新」学力観の多くは、既に皆さんが授業で実践済みであること、②「新」学力観を評価する方法も開発されているということ、③これからの教員に必要な信念についてである。

---

\* 藤女子大学人間生活学部

## 1. 「新」学力観とは何か

ここで提示する次の学習指導要領に影響を及ぼすと考えられる「新」学力観<sup>2)</sup>は、①DeSeCo<sup>3)</sup>、②21世紀型スキル<sup>4)</sup>、③21世紀型能力<sup>5)</sup>を提示したい(表1)。

表1 三つの新学力観

	DeSeCo	21世紀型スキル	21世紀型能力
①	相互作用の道具活用能力 ・ 言語, 記号の活用 ・ 知識や情報の活用 ・ 技術の活用	・ 情報リテラシー ・ メディアリテラシー ・ ICTリテラシー	基礎力 ・ 言語スキル ・ 数量スキル ・ 情報スキル
②	反省性(考える力) ・ 協働する力 ・ 問題解決力	・ 創造とイノベーション ・ 批判的思考と問題解決 ・ 学び方の学習 ・ 協働	思考力 ・ 問題解決・発見力・創造力 ・ 論理的・批判的思考力 ・ メタ認知・適応的学習力
③	異質な集団での交流力 ・ 人間関係力 ・ 協働する力 問題解決力	・ キャリアと生活 ・ 柔軟性と適応性 ・ 進取と自己方向づけスキル ・ リーダーシップ ・ プロジェクト管理 ・ 個人的・社会的責任 ・ シチズンシップ	実践力 ・ 自律的活動力 ・ 人間関係形成力 ・ 社会参画力 ・ 持続可能な未来づくりへの責任
④	自律的活動力 ・ 大きな展望 ・ 人生設計と個人的プロジェクト ・ 権利, 利害, 限界や要求の表明		

三つの学力観は、いずれも、従来型の知識技能の習得を大切にしながらも、それらに固執することなく、これから予測困難な社会に対応できる人材を育成すること目標にしている。そのような考え方は、今年度から札幌市内の中等教育学校でも導入されることとなった国際バカロレア(IB)とも共通する<sup>6)</sup>。「新」学力観を、私なりに三つの領域に分けて、IBと組み合わせて示してみたい。

第一に「生活するために必要な基礎力」である。これはIBの学習者像の一つである「知識のある人」に関連しよう。そして、三つの学力観では①に相当する。これは、従来型の学力(知識・技能)に近いイメージである。ただし、暗記だけではなく情報を分析し、その内容を活用することを重視している。

第二に「自分を成長させる力」である。これは、IBの「探究する人」「考える人」「信念のある人」「挑戦する人」「バランスのとれた人」「振り返りが出来る人」に関連しよう。そして、三つの学力観では②と④に相当する。学びは学校だけで行われるものではない。学校を卒業し、教員に導かれなくとも人は学び続けなくてはならない。そのように自らを律しつつも、学び続けられる土台を意識した学力であるといえる。

第三に「他者と協働する力」である。これはIBの「コミュニケーション出来る人」「心を開く人」「思いやりのある人」に関連する。教員の皆さんとお話すると、家庭環境の多様化に話題が及ぶことが度々ある。様々な環境で人が育つということは、多様な価値観をもつ生徒も多いということでもある。それぞれがもつ価値観を重視する家庭科の場合、この他者と協働し、仲間の多様性を受容しつつ、現実と折り合いを付けていく取組は、今後、一層重要となってくるであろう。

では、これまで述べてきた三つの領域の学力観は、現在の学習指導要領では求められてはいないのだろうか。例えば、高等学校・学習指導要領（家庭科）には、目標として以下のように書かれている。

人間の生涯にわたる発達と生活の営みを総合的にとらえ、家族・家庭の意義、家族・家庭と社会とのかかわりについて理解させるとともに、生活に必要な知識と技術を習得させ、男女が協力して主体的に家庭や地域の生活を創造する能力と実践的な態度を育てる。

ここでは、従来型の知識と技能の習得に加え、主体性や創造力、実践力も目標に含まれていることがわかる。さらに、ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動の目標には以下の記述がある。

自己の家庭生活や地域の生活と関連付けて生活上の課題を設定し、解決方法を考え、計画を立てて実践することを通して生活を科学的に探究する方法や問題解決の能力を身に付けさせる。

これらの記述は、課題や、それに対する解決方法を見つけ、計画を立て、そして実践するという、「新」学力観においても求められている項目である。ひとつ欠けているのは、「他者と協働する」という視点である。ただし、大部分の「新」学力観は、現行の学習指導要領でも既に提示されている項目であった。

ここで、関心を持たざるをえないのは、実際に、現行の学習指導要領で示されている「学力観」を意識した授業が実際に行われているかどうかである。「はじめに」で私が提示した「理想と現実」の問題が頭をよぎる。そして、教員の立場ならば、これらの学力の評価方法が気になるに違いない。いわゆる客観的な評価が難しいという理由で、このような学力を測ることを躊躇する教員も多いだろう。実際、私もそのように考えていた。

## 2. 新「学力」をどのように評価するのか：ルーブリックという手法

家庭科の目標は既述のとおりであるが、国立教育政策研究所は評価観点（表2）についても、2012年に提示している。

表2 高等学校家庭科の評価の観点及びその趣旨

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
家庭や地域の生活について関心を持ち、その充実向上を目指して主体的に取り組むとともに、実践的な態度を身に付けている。	家庭や地域の生活について課題を見だし、その解決を目指して思考を深め、適切に判断し工夫し想像する能力を身に付けている。	家庭や地域の生活を充実向上するために必要な基礎的・基本的な技術を身に付けている。	家庭生活の意義や役割を理解し、家庭や地域の生活を充実向上するために必要な基礎的・基本的な知識を身に付けている。

これらの評価の観点を参考にした上で、「知識や技能のみの評価など一部の観点到偏した評定が行われることがないよう」、そして、「評定が教師の主観に流れて妥当性や信頼性等に欠くことがないよう」留意していかなければならない。この四つの観点は当然ながら重要かつ本質的なものである。しかし、あえて指摘するのであれば、「知識・理解」「技術」を土台としながら、「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」に関連させる説明が重要となろう。つまり、基礎基本から得られる情報や経験を生徒自らが分析してこそ、日常生活の課題を見出すことができ、それを解決することができるからである。

そのような考えは、教員の皆さんも常に考え、そして実践していると思われる。しかし、それらの実践から生徒が身に付けた学力を評価することは難しいと感じている方も多いのではないか。その一つの工夫として、国立教育政策研究所は評価規準の設定を推奨しているのである。

評価「規準」に、習得状況の程度を示す評価「基準」を明確に示していくのがルーブリックという評価手法である。ルーブリックは、その聞きなれないカタカナからも少し敷居が高い実践かもしれない。確かに、これから紹介するように、導入期においては「面倒」であることは否定しない。しかし、一度、導入してしまえば、その発展可能性は大きい。

ここでは、オーストラリアの高等学校における「コミュニティと家族研究」(選択教科)の試験問題を例にとってルーブリック要素を取り入れた評価を紹介してみたい。例えば、下記のような試験問題がある<sup>8)</sup>。

親となり、子育てをする時の責任の一つに躰があります。家庭の文化差、ジェンダー差によって、子どもの躰の方針はどのような影響を受けるでしょうか<sup>9)</sup>。

なかなか生徒にとっても、教員にとっても骨の折れる問題である。生徒はA4一枚に考えを整理し、記述することが求められる。これは特定の学力が高い学校ではなく、州全体の高校三年生が修了試験として受験する共通問題である。そして、この問題を表3のような基準で評価するとしている<sup>10)</sup>。

表3 記述式問題を評価する際の評価基準の例

基準	得点
賡に関する文化差とジェンダー差の違いについて、適切な結論を明確に説明している。関連している例もいくつか提示している。	6
賡に関する文化差とジェンダー差の違いについて、適切な結論を説明している。関連している例も提示している。	4-5
賡に関する文化差とジェンダー差の問題の情報を記述している。例は個人的な経験から提示している。	2-3
文化もしくはジェンダー差もしくは賡について、一項目のみ指摘している。	1

ここでは、四段階で評価するための基準が設定され、いわば「(根拠に基づいて)客観的」に記述式問題を採点しているのである。このような評価方法は、記述式のみならず、グループワークやプレゼンテーションにも応用することができる。また、この基準を課題作成「前」に示すことによって、形成的評価、自己評価にも活用することが可能である。

#### おわりに

これまで紹介してきたように、今後5年間で、日本の学校教育を取り巻く学力観は、これまでにない変化が予見される。正答が一つしかない知識・技能を重視する学力観からの脱却である。しかし、これらは現行の学習指導要領でも、提示されている学力観でもあった。教員にとって、生徒の学力はその評価と表裏一体である。そのため、これから一層、重視される学力評価は、規準と基準を明確にしたルーブリック形式の導入が望まれることを提案してきた。これは、他教科と比較して、より日常に関連した実践的学力が求められる家庭科においては殊更である。

しかし、これらの学力観とその評価方法も、いつまで適切であり続けるかは予測がつかない。時代の変化に柔軟性をもって対応しながらも、信念を持ち続け、自らも主体的・協働的に学び続けることができる教員が、今後一層求められることは間違いない。

## 注

- 1) この原文は文部科学省のホームページで読むことができる。  
([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1353440.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1353440.htm)) 2015年6月18日アクセス確認
- 2) このような学力について関心のある方は、松尾知明『21世紀型スキルとはなにか：コンピテンシーに基づく教育改革の国際比較』明石書店、2015年を一読のこと。今後求められる学力観が、国際比較を通して分かりやすく提示されている。
- 3) DeSeCoとはOECD:経済協力開発機構が設定した「コンピテンシーの定義と選択(Definition and Selection of Competencies)」の略である。
- 4) Partnership for 21<sup>st</sup> Century Skills という、アップルやインテル、マイクロソフトなどの企業手動の非営利団体が提示した。
- 5) 国立教育政策研究所『社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則』2013年。この文書は、<http://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/Houkokusho-5.pdf> で入手可能である。(2015年6月18日アクセス確認)
- 6) 国際バカロレアについては、文部科学省のウェブサイト詳しい。  
([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/ib/](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/ib/)) 2015年6月18日アクセス確認
- 7) 国立教育政策研究所『評価基準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【高等学校共通教科「家庭」】』, 23頁, 2012年
- 8) Board of Studies (New South Wales), *2013 Higher School Certification Examination: Community and Family Studies*, Question 25, 2013.
- 9) ここでの躰は、setting limit の訳である。本来ならば、心理学用語の限界設定と訳すべきであるが、ここでは親しみやすさを重視して躰と訳した。
- 10) Board of Studies (New South Wales), *2013 Higher School Certification: Community and Family Studies : Marking Guidelines*, Question 25, 2013.